

石川求著『カントと無限判断の世界』書評会  
(東京都立大学哲学会・首都大学東京哲学教室共催)

## 司会のあいさつ

植 村 恒一郎

皆さん、それではシンポジウムを始めたいと思います。私は司会の植村と申します。最初に、石川氏の本とカントの「無限判断」について、ごく簡単に説明しておきます。

- (1) 本書は、カントが『純粹理性批判』で論じた「無限判断」が、20世紀初頭から現在に至るまで誤って理解されたことを明らかにし、その正しい読みと解釈を提出する。それは小さな問題のように思われるかもしれないが、そうではない。「無限判断」の理解によって、カント哲学の全体、ひいては人間の知識の本性をどのように考えるかが違ってくる。「無限判断」とは、「否定判断」に形式上は似ているが、実は異なるものであるとカントは考えた。ところが、『純粹理性批判』では、「否定判断」の例としても「無限判断」の例としても、「魂は死ぬものではない Die Seele ist nicht sterblich.」という同じ文章が挙げられているので、後世の学者たちは戸惑ってしまった。カントの同時代の哲学者たちは主旨を正しく理解したが、19世紀末のカント学者たちは、「無限判断」と「否定判断」の例が同じ文章なのは変だから、「無限判断」は、「nicht sterblich」ではなく「nichtsterblich」の書き間違いか誤植だろうと、二つの語の間にあった空白を取って「不死的な」という一語の述語にした。そうでないと、カントが「否定判断」とは区別される

「無限判断」という新たな判断を立てた理由が分らないと考えたのだ。1904年のアカデミー版からはこのように修正され、その後は世界中でそのように解釈された。すべての日本語訳も、「否定判断」は「魂は死ぬものではない」であり、「無限判断」は「魂は不死的である」と、訳し分けている。

- (2) しかし、石川氏が本書で説明するように、否定判断も無限判断もともに「nicht sterblich」と間に空白がなければならぬ。その理由は、形式論理学の視点からは同じ判断であっても、超越論的論理学の視点からは異なる判断であるというのがカントの主旨なので、二つの判断は形の上では同じでなければならぬのである。同じ形式の判断であっても、その「否定」の機能が違う。これが大切な論点である。形式論理学の視点では、否定判断「魂は死ぬものではない Die Seele ist nicht sterblich.」という否定は、魂という主語の、「死ぬもの」という述語外延の内部での所属を考えるという、通常の否定である。「このバラは赤くない」と同じで、「死ぬもの」という閉じた外延の内部における所属／不所属を問題にしている。
- (3) ところがこの同じ「魂は死ぬものではない Die Seele ist nicht sterblich.」という判断の nicht という否定の機能は別様にも解釈できる。というのは、可能的存在者の外延は無限であるが、「死ぬもの」という存在者の外延はその「一部」だから、この nicht という否定の意味するものは、「<死ぬもの>という一部の外延ををすべて排除しても、なお無限の外延が残っている」ということを言っている。つまり、閉じた外延の「外に出る」ことそれ自体を意味する nicht なのである。主語の、閉じた外延の内部の述語規定への所属／不所属を言うのが否定判定における nicht であるならば、閉じた外延そのものからその外に出ること自体を意味する nicht の働きは別の機能である。だからカントはこれを「無限判断」と呼んだ。ポイントは、超越論的論理学は形式論理学とは異なるという点にあり、そのためには判断そのものの具体的な形式は、否定判断も無限判断もどちらも「魂は死ぬものではない Die

Seele ist nicht sterblich.」という同じものでなければならない。「nichtsterblich」などという勝手な一語を作ってはいけないのである。

- (4) これは小さな話のように思われるかもしれないが、そうではない。ここでカントは、そもそも「否定」とは何なのかという、哲学の最重要の話をしている。我々の知識はどんなに完全に見えても実は不完全である。知識は、形式的には、ある主語の一定の閉じた外延の内部での所属／不所属を言うが、「否定」をその機能にのみ見ることは、当該の知識を絶対視することである。しかし「否定」の機能を、閉じた外延の外に出ることと捉えるならば、それは我々の知識が不完全かもしれないという謙虚な態度を意味する。人間の言語における「否定 nicht」が持つもっとも根源的な機能はむしろこちらにある、というのがカントの主旨なのである。
- (5) このような否定の根源性の洞察は、『純粹理性批判』だけにあるのではなく、石川氏は、『実践理性批判』においても、定言命法とは異なって、根源的な否定性がカントの倫理学の内部に位置を持ちうる可能性を指摘する。これは倫理の根源に、他者という否定性を考えたレヴィナスの視点にもつながるものであり、「全体性」と「無限性」を区別したレヴィナスとも、カントの無限判断論は呼応するところがあるだろう。ベンノ・エルトマンやヘルマン・コーエンが、カントの無限判断を読み誤ったのは、我々の哲学的思考がいかに「肯定的なもの」に飢えているのかを図らずも示している。本書が、「無限判断」の意味するものを古代ギリシア哲学にまで遡って掘り起こし、その中にカントのテキストの読み誤りを位置づけたことは、哲学研究としても哲学史研究としても貴重な仕事と言える。